☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉砕し、世界革命戦争―世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1983年
10月10日
第352号
編集発行人 高木一夫
一部 200円

烽火 NOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）
■ 大阪戦旗社　大阪市大淀区本庄東2丁目2の31 とみやビル15号 Tel(06)371-3706
○郵便振替　大阪3－63333　高木一夫
○銀行口座　第一勧銀　515-1058150　高木一夫
■ 東京戦旗社　東京中央郵便局　私書箱1114号

レーガン来日・訪韓阻止！

労働者政治委員会をプロレタリア政治闘争の最前線へ

今秋季政治攻防は、ソ連による「大韓航空機撃墜事件」を利用した各国帝国主義のすさまじいばかりの反ソ・反共・排外主義煽動によって幕をあけた。この事件の本質は、決して、ブルジョアジーどもが叫ぶように「ソ連の残虐性・非人道性」や「共産主義の好戦性」にあるわけではない。日米帝による侵略反革命戦争準備とソ連への軍事的対抗が、全世界的に戦争前夜ともいうべき軍事的緊張を生み出していること、そして極東地域においても一触即発にまで至っていることが、この事件の最大の背景にあることは明らかである。そして、この事件をひきおこした直接の契機こそ、大韓航空機が、ソ連機による警告を無視し、二時間余にわたってソ連領空を侵犯しつづけたことにあった。このカムチャッカからサハリンに至る地域は、極東におけるソ連の軍事的要衝である。この地域における大韓航空機のこのような行動は、ソ連の側にそれを阻止する緊急の政治的・軍事的必要性をひきおこすに充分なものであった。

日米帝は、このことをおおいかくし、ひたすらソ連への憎悪を煽りたてている。そして「この事件によって世界史は新しい段階に入った。ソ連との長期戦をたたかえる国防力の強化を」（レーガン）と叫び、労働者人民を軍備増強と戦争準備に組織せんとやっきになっている。たたかうプロレタリアートは、今秋季、ふりかかる排外主義の大攻勢に全力で反撃を組織し、日米帝の戦争準備との闘争にたちあがらねばならない。同時にわれわれは、この事件に対するソ連の態度に関する基本的見解を明らかにしておく。ソ連による大韓航空機の撃墜が、結果として多数の民間人を死に至らせ、世界各国の階級闘争に一時的にではあれ、大きな障害をもたらしていることは事実である。ソ連は、いかに撃墜せざるを得なかった政治的・軍事的緊要性が存在したとしても、それとは相対的別個に、国際的な共産主義運動と階級闘争の利益のために、民間人の死者へ早急に補償をおこない、国家として正式に遺憾の意を表明すべきであったと考える。しかし、ソ連はソ連邦国家利益の防衛に腐心し、困難に直面する各国階級闘争への連帯を放棄しつづけている。このような反国際主義的態度は、決して容認しえないものである。

すべての労働者人民諸君！嵐のような排外主義煽動をともないながら、今秋十一月米帝レーガンが来日・訪韓・ASEAN歴訪しようとしている。中米・中東・アジア人民との国際主義的連帯の旗をうちふり、レーガン来日・訪韓阻止闘争へ全力で決起せよ！そして、社共の排外主義政治、右翼日和見主義の市民主義政治をふみしだき、日帝の戦争とファシズム準備と対決する壮大なプロレタリア政治闘争を基礎から建設していく事業にとりかからなければならない。わが共産同（全国委）は、階級的労働運動の全国陣型建設の成果を総結集し、新たに結成した革命の伝導路＝全国労働者政治委員会をおしたて、このたたかいの最先頭にたつ決意である。

マルコス政権打倒に起ちあがった
フィリピン人民（9月21日マニラ）

1 高揚する全世界の反帝民族解放闘争

八三年秋、全世界において反帝民族解放闘争の巨大な高揚が生み出されている。そして米帝をはじめとした各国帝国主義、反共軍事独裁政権との闘争は、きわめて重大な局面を迎えている。たたかうプロレタリアート人民は、反ソ・反共・排外主義煽動の嵐を打ち破り、わが国階級闘争を真紅の国際主義で武装するために全力をつくさねばならない。

中南米・中東のたたかい

中米諸国における反帝民族解放闘争は、七九年七月十九日のニカラグアにおけるソモサ独裁の打倒、サンディニスタ革命の勝利以降めざましい前進をかちとってきた。かつて「アメリカの裏庭」といわれ、米帝が好き放題に収奪してきた中米諸国は、今や全世界の反帝民族解放闘争の最前線となっている。

エルサルバドルでは久しい間「十四家族」と呼ばれるひとにぎりの特権支配層が、土地の六〇％を占有し、国民所得の三分の二を収奪し、苛酷な軍事独裁支配をおこなってきた。しかし、エルサルバドル労働者人民は、八〇年五月にすべての反政府勢力を結集して民主革命戦線（FDR）を結成し、その軍事組織としてファラブンド・マルチ民族解放戦線（FMLN）を組織し、全土において激しい武装闘争をたたかってきた。FMLNは、今や国土の三分の一を解放し、「アメリカの支援がなければ六ケ月ともたない」といわれるところまで軍事独裁政権をおいつめている。

グァテマラでも八二年二月に、グァテマラ民族統一戦線が結成され、反共軍事独裁政権を崩壊寸前にまでおいやっている。

中米諸国における反帝民族解放闘争のこのような前進はけっして偶然の産物ではない。それは、七〇年代を通して、反帝民族解放をかかげた広範な民族的統一戦線と武装闘争を準備してきたこと、そしてなによりも「われわれは、革命の科学的教義によって、マルクス・レーニン主義によって自らを導く」（ニカラグア・オルテガ国防相）と宣言するように、反帝民族解放闘争とプロレタリア社会主義革命を固く結びつけてたたかわんとすることによってもたらされてきたものだったのである。

チリ人民のピノチェト独裁政権への闘争

またチリをはじめ南米諸国においても、プロレタリア人民の決起があいついでいる。チリでは、ピノチェット軍事独裁政権の苛酷な弾圧と飢餓賃金、三〇％をこえる失業に抗議し、五月十一日、六月十四日、七月十二日、八月十一日と四波におよぶ全国抗議行動が組織された。とりわけ八月十一日から十三日の三日間には、軍隊による十数名の虐殺をはねのけ、チリ労働者は各所にバリケードを築き、市街戦をたたかいぬいた。このような労働者の決起は、アルゼンチン、ブラジル、ペルーへと南米諸国に波及している。

米帝レーガンは、「中米地域は戦争下にある。これはソ連・キューバの策謀・煽動によるものであり、その軍事基地はニカラグアだ。こうした動きは、米州大陸にたいする初の本格的な共産主義の脅威である」と宣言し、前進する反帝民族解放闘争を鎮圧すべく、すさまじい反革命軍事介入と戦争準備を進めている。

米帝はニカラグアに対してはCIAの直接指揮のもと、旧ソモサ軍をかり集めて「ニカラグア民主軍」なる反革命軍を組織し、ホンジュラスを基地としてニカラグアに送りこんだ。これによってニカラグアは今春以降、事実上の内戦へと突入している。

またエルサルバドルに対しては、八一年三月、軍事顧問団の派遣と二五〇〇万ドルの軍事援助をもって本格的な介入にふみだした。そして八三年七月三一日、「左翼ゲリラ撃退作戦のため可能な限り必要な措置をとる」と宣言し、軍事顧問団の増派と政府軍の直接指揮、一億一千万ドルの軍事援助を決定した。

そして米帝は、ワインバーガー国防長官の現地指揮のもと、八月一日から八ケ月間にわたって「アワスタラII」という名の大規模軍事演習を開始している。それは、ニカラグアをはさんで、空母コーラルシー機動部隊などと、空母レンジャーなどの太平洋艦隊、そして戦艦ニュージャージー機動部隊が海上演習を展開し、陸上ではホンジュラスで、ホンジュラス政府軍との合同演習を全期間にわたっておこなうというものである。これはもはや演習ではない。キューバ・ニカラグア・エルサルバドル（FMLN）間の補給ルートを絶ち切り、ニカラグアの海上封鎖を狙うものであり、米軍の事実上の参戦にほかならない。これに対しキューバは、「ニカラグアを支援し、最後の血の一滴までたたかう」（カストロ首相）と宣言し、ニカラグア政府は次のようにニカラグア人民によびかけている。「人民権力を守るためすべての人民に武器を！この新しい社会を守るためすべての人民に武器を！平和を守るためすべての人民に武器を！この自由な社会を守るためすべての人民に武器を！しからずんば死を！」（七月十九日、革命四周年記念集会）と。われわれはきわめて重大な局面を迎えた中米の反帝民族解放闘争に連帯し、米帝の軍事介入を粉砕しなければならない。すでに七九年以降日帝は、エルサルバドルやホンジュラスなど反共軍事独裁政権への援助を開始しており、中米人民への連帯と援助は日本プロレタリアートの責務ですらある。

激動をつづける中東地域では、レバノンとチャドを焦点に反帝民族解放闘争が新たな前進を開始している。レバノンにおいては、昨年のイスラエル軍事侵略によって、いったんおおきな後退を余儀なくされたパレスチナ解放勢力が反攻に転じつつある。七月から激化した右翼ファランジスト党とイスラム左派「救国戦線」の戦闘は、九月に入って、パレスチナゲリラとイスラエルに支援されたレバノン政府軍との戦闘に発展しつつある。そして九月中旬、米帝第六艦隊がレバノン沖に集結し、ベイルート砲撃をもって事実上参戦するという段階に突入している。パレスチナ解放勢力のこの攻勢の背景には、今春以来のPLO内の対立が存在している。PLOの最大勢力ファタハ内の対立は、結局のところ、パレスチナ民族解放闘争の将来を米帝主導の「中東和平」に展望し、エジプトやヨルダンの反動化した民族ブルジョアジーや王族共にゆだねるのか、それともあくまで反帝国主義の旗を堅持し、民族解放闘争と社会主義革命の結合に至る道を進むのかをめぐる対立であった。PLOの多くの戦闘的部分は前者の屈服の道を排し、ふたたび前進を開始している。またチャドにおいては、米帝・仏帝そしてエジプト・スーダンなどアラブ反動諸国に支援されたハブレ政権に対する内戦が激化している。

東アジア諸国のたたかい

アジアにおける反帝民族解放闘争もまた韓国、フィリピンを先頭に高揚を続けている。フィリピンでは、八月二一日のマルコス独裁政権によるアキノ氏殺害を契機にして巨大な反マルコス闘争が燃えあがっている。八月三一日におこなわれたアキノ氏の葬儀には一〇〇万人もの人民が参加し、九月一六日には、民主野党連合を中心に、マルコス打倒をかかげた一万名をこえるデモが組織された。そして戒厳令布告十一年にあたる九月二一日、マニラにおける十万人をこえる集会を中心にして、マルコス体制下での最大の反政府闘争がうちぬかれた。そして、たたかいの先頭に立った学生数千人は、火炎ビン・手製爆弾で武装し、警察車両を焼き払い、軍隊・警察と激突した。この日の闘争では、反マルコスとな

らんで反米・レーガンフィリピン訪問阻止！のスローガンが正面からかかげられた。フィリピン労働者人民のたたかいは、いま巨大な規模で反帝民族解放闘争への前進を開始しつつある。そしてこの全人民的な高揚と結びつき、新人民軍やモロ民族解放戦線の武装闘争がさらに拡大しつつある。

また韓国では、光州蜂起三周年の五月一八日から二三日間にわたって、元新民党党首・金泳三氏が民主化を要求してハンストを敢行し、ソウル大・高麗大をはじめ、全国各地で学生決起があいついだ。それは、今秋季、より激烈に発展しようとしている。韓国労働者人民の闘争は、八〇年五月光州蜂起を境にその質をおおきく飛躍させた。かつて「反米運動無風地帯」といわれた国において、八二年三月釜山アメリカ文化センターに火が放たれ、青年・学生の決起の旗には、常に全斗煥打倒とならんで、反米（帝）、反日（帝）のスローガンが高くかかげられている。そして光州蜂起白書（八一年）や「我方他方」（八三年）などの地下文書が示すように、最も先進的部分は、光州蜂起の総括から「革命政府と革命軍の準備」「革命の戦術の確立」を課題とするまでに成長しつつある。韓国における闘争は、広範な人民の反帝反独裁をかかげた民族的闘争と、計画されたプロレタリア社会主義革命の準備を固く結びつけていくという新たな段階を迎えているのである。

中南米諸国において、中東諸国において、アジア諸国において、民族の解放と社会主義を求めるたたかいの炎が激しい勢いで燃えあがっている。われわれは、死を賭してたたかう全世界のプロレタリアの兄弟姉妹に、今こそ熱い国際主義的連帯をもって応えなければならない。

レーガン来日・訪韓阻止をかかげて総決起し日米帝の侵略反革命戦争準備を粉砕せよ！そして帝国主義列強のなかで米帝につぐ反革命的役割をはたす自国帝国主義＝日帝の打倒と、プロ独裁権力樹立の準備戦に全力で結集しなければならない。

②　レーガン来日・アジア歴訪阻止せよ

深まり続ける資本主義の世界的危機にもかかわらず、米日帝などいくつかの帝国主義ブルジョアジーは、八三年に入って「アメリカや日本は、不況から脱出しつつある」と主張しはじめた。だがそれは「不況からの脱出」とは程遠いものであり、かつ一時的なものである。なぜなら米日などの「景気回復」は、㋑米西欧諸国では軒なみ一〇％をこえる失業率に示されるように、国内労働者人民からの強収奪に支えられたものであり、それはいささかも改善されていないこと、㋺そしてそれは「第三世界」諸国からのすさまじい収奪と、ブラジル・メキシコ・韓国など「中進国」の債務奴隷国化とひきかえにしたものだからである。「第三世界」諸国の経済成長率は、八二年にこの二〇年来で最低の水準におちこみ、アフリカ諸国では一人あたりの所得が六〇年代の水準にも達していない。また中南米諸国を中心に帝国主義諸国からの累積債務が巨大な額にのぼっている。ブラジルの八三年累積債務は八三三億ドル、同じくチリ一八〇億ドル、アルゼンチン二二七億ドルに達し、中南米諸国平均ですら輸出収入の五二％が債務返済にあてられるという国家的破産の寸前にいたっている。それが各国労働者人民の飢餓賃金と失業の激増に転化されていることはいうまでもない。こうして世界資本主義のより破局的な危機の条件が拡大し、耐えがたいまでの貧困と抑圧のなかから、全世界的な反帝民族解放闘争の巨大な高揚が不可避に生みだされつつあるのである。

資本主義が資本主義である限り、この構造から脱け出ることはできない。各国帝国主義には、市場・資源・領土をめぐるたがいの強盗的抗争を激化させつつ、高揚する反帝民族解放闘争を鎮圧するための軍事介入、侵略反革命戦争につき進む以外に道は存在しないのである。

来日・アジア歴訪の狙い

米帝＝レーガン政権は、この深刻な危機を突破すべく対ソ戦争を想定した際限ない軍備増強と、反帝民族解放闘争への反革命軍事介入を強化してきた。レーガンの軍事戦略は「同時多発報復戦略」と「柔軟戦略」を骨格とするものである。「同時多発報復戦略」とは「ソ連がある地域で攻撃を加えた時、それ以外の地域においても同時多発的に核兵器による報復をおこなう」という危険きまわりないものである。そのために八三年秋には、西欧諸国にパーシングⅡ（中距離核ミサイル）、巡航ミサイルを配備し、八四年六月には、トマホーク（核巡航ミサイル）の極東配備を強行せんとしている。そしてレーガンは「戦術核兵器の先制使用もありうる」と広言してはばからないのだ。また「柔軟戦略」とは、インド洋に展開する米機動部隊の一部を「柔軟戦略部隊」として日本海、北太平洋、カリブ海に投入するというものである。この軍事戦略のもと、レーガン政権は「アワスタラⅡ」に示されるごとく、全世界で激発する反帝民族解放闘争を鎮圧するために、血ぬられた軍事介入と侵略反革命戦争策動をかつてなく強化しているのだ。

このような緊迫した情勢のもとで、レーガンは、十一月六日頃フィリピンなどASEAN諸国を訪れ、十一月九日に来日し、数日間滞在した後、韓国を訪れる。このレーガン来日・アジア歴訪の目的は、中曽根訪米・全斗煥訪米の「答礼」という以外、いまだ明らかにされていない。しかしその反動的目的が次の点にあることは明らかである。

第一に日米安保を臨戦体制、即戦体制へとさらに再編強化することである。一月中曽根訪米・日米首脳会談をもって、日米安保は「日米運命共同体論」にもとづく軍事同盟へと飛躍的に強化されてきた。その基本方向は、日米安保を中東・中南米における米帝の反革命軍事行動を支え、アジアにおいては、対ソ軍事対抗と反帝民族解放闘争鎮圧の中軸をになうものへと強化することにある。その意味で日米安保は、NATOとならぶ戦略的軍事同盟へと大きく性格を変えつつあるのだ。このもとで三月米空母エンタープライズ佐世保寄港、十月一日最新鋭原子力空母カールビンソン佐世保寄港と米海軍主力艦船の寄港があいついでいる。また日米両軍の共同軍事演習も、六月の沖縄における「バリアント・ブリッツ作戦」、今秋、北海道での陸上自衛隊一五〇〇名、米軍九〇〇名による共同実動演習、十月カールビンソン寄港にあわせた合同演習などかつてない規模に達している。そして日米共同作戦研究も、「日本有事」「極東有事」「シーレーン防衛」を想定して急ピッチですすめられている。十一月レーガン来日は、このような日米軍事同盟の飛躍的強化を狙うものである。

第二に日米韓の軍事一体化をおしすすめることである。日米両帝国主義は南朝鮮をアジアにおける「反共の砦」としてうち固め、ソ連と軍事的に対抗しつつ、反帝民族解放闘争勢力に対する前線基地として強化しようとしている。日帝による韓国への四〇億ドルの援助決定、来年初頭とも言われる全斗煥来日策動など、日帝が主導的役割をにないつつ、レーガン・中曽根・全斗煥一体となった策動が進められている。

そして第三に、アジア諸国の反共軍事独裁政権に強力なテコ入れをおこない、反帝民族解放闘争を鎮圧することである。前章において詳しく見たように、韓国・フィリピンをはじめとする反帝民族解放闘争は、おおきく前進している。全斗煥、マルコスなど反共独裁政権は、日米帝の経済的・政治的・軍事的バックアップなしには、もはや一日たりとも権力を保持しえないまでの危機に頻しているのである。

日帝＝中曽根の戦争準備

このような意図をもつレーガンのアジア歴訪を、中曽根政権は全面的にバックアップし、同時にこの機をとらえて日帝自身の侵略反革命戦争とファシズムの準備を加速させようとしている。「日本列島を不沈空母にする」とぶちあげた中曽根政権は、八三年度防衛白書

において㈠「ソ連の脅威」を強調し、㈡「西側諸国の安全保障に寄与し、アジア、ひいては世界の平和と安全に貢献する」とアジアのみならず全世界における反革命的役割をひきうけると宣言し、㈢「保有すべき防衛能力」として「航路帯千カイリ防衛」と「四海峡封鎖」を公式にうちだした。そして八四年度防衛予算概算要求は二兆九四三七億円（前年度比六・八八％増）にのぼるなど戦争準備を急ピッチで進めている。これと結びついて九条の改悪と天皇元首化を狙う改憲準備、靖国神社国家護持を狙う閣僚の靖国神社公式参拝の合憲化、軍拡と官公労働運動の解体狙う行革攻撃など、戦争とファシズムへの歴史的転機を画さんとする攻撃をうちおろしている。

そして中曽根は、八月二九日の自民党夏季全国研修会において「秋の臨時国会を戦後政治の総決算の場とする。経済・外交・福祉などについて戦後争点を洗い直し国民の選択を求める」と表明し、上からの攻勢的な排外主義的統合にふみだすと宣言した。事実中曽根は臨時国会冒頭、社会党の「非武装中立論」を口をきわめて批難し、軍備増強の大煽動をふりまいたのである。

このような日帝の戦争とファシズム準備に労働運動の内部から合流していくものこそ、現代の産業報国会をめざす帝国主義的労戦統一である。この動向は一昨年十二月全民労協結成を経て、八五年には官公労を含む巨大な反共右翼ナショナルセンターを登場させんとしている。今夏の総評大会とそれを前後する各単産大会は、総評の労戦統一への合流ぶりをうきぼりにした。総評大会は「全民労協主導型への転換」をうちだし、「国鉄労働者は合理化に協力せよ」「低成長時代の新しい賃金要求（賃上げ抑制）を」と叫ぶ私鉄総連委員長黒川を総評議長に選出した。総評労働運動の解体と産報化への合流は、いよいよ最終局面を迎えている。

③ プロレタリア政治闘争を建設せよ！

日帝＝中曽根の戦後史を画する攻撃のもとで、いよいよわが国のプロレタリア人民の前には、日帝の戦争とファシズム準備に膝を屈するのか、それともプロレタリア社会主義革命（武装蜂起―プロ独権力樹立）にむけた一時代を費やす準備戦に起ちあがるのか、この二つの道以外にはありえないことが明確になっている。われわれは、すべてのプロレタリア人民によびかける。今秋レーガン来日・訪韓阻止闘争に全力で決起し、プロレタリア社会主義革命にむけた壮大なプロレタリア政治闘争の建設戦を開始しよう。反戦反核運動を階級的に領導し、社共の排外主義的・反プロレタリア的政治から圧倒的なプロレタリアートを奪い返すために全力を集中しよう。そのためにわれわれは、プロレタリア政治闘争に関する原則的立場と基本方向、レーガン闘争の獲得目標を提起する。

創出されるべき政治闘争

わが国におけるプロレタリア政治闘争の建設戦とは、被抑圧階級の段階にあるプロレタリアートの最高の政治要求＝プロレタリア独裁権力の樹立と、最高の政治決起＝プロレタリアートの全国一斉武装蜂起をかかげた政治闘争に、プロレタリア階級を組織していくための長大なたたかいである。それは階級闘争の自然発生性の直接延長上にはいささかも期待しえぬ、党の指導による意識的な階級形成事業である。それは、原則上次の三つのたたかいを緊密に結びつけて組織することをもって戦取されるものである。

第一に、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争の結合を組織すること。経済闘争とは生きんがために、食わんがためにプロレタリアートが雇主に対しておこなう集団的闘争であり、それは一時的な改良の成果を獲得することとはできても、プロレタリアートの根本的な経済的利益（賃金奴隷制の廃絶）を実現することはできない。また、労働条件の差異とブルジョアジーによる分断ゆえに個別性・分散性を不可避とする。他方、プロレタリアートの根本的な経済的利益は、ブルジョアジーの独裁をプロレタリアートの独裁におきかえる政治革命をもってはじめて実現することができる。それゆえ、政治闘争をもってのみ、経済闘争の個別性・分散性を止揚することができる。

労働運動の中から自然発生的に成長してくる政治闘争は、プロレタリアートの境遇につきものの困苦の克服を目的とするが、まだこの境遇そのものを、すなわち資本への労働の隷属を廃絶しないあれこれの方策を国家に実施させようとするプロレタリアートの共通の志向を表現するものである。われわれの任務は、この自然成長的な政治闘争をプロレタリアートの目的意識的な政治闘争へと転化することにある。

それは、経済闘争を基盤とした政治煽動だけではなしえず、全面的政治暴露・政治煽動が組織されねばならない。それは経済闘争の外部から、国家と諸階級層の関係を自覚する革命的プロレタリアートの意識的指導をもちこむことを通してのみなしうることである。

第二に、プロレタリア政治要求・政治闘争による全人民的政治要求・政治闘争の階級的領導を組織すること。当面するわが国の革命の性格は、プロレタリアートの全国一斉武装蜂起―プロレタリア独裁権力の樹立による政治革命であり、プロレタリア政治闘争はこのもとに目的意識的に領導されねばならない。

また、全世界の民族がひと握りの抑圧民族と圧倒的多数の被抑圧民族に分裂した帝国主義の時代、全世界的な社会主義への移行が開始された現代過渡期世界における政治闘争は、民族国家間におけるプロレタリアートの分断と対立を止揚する国際主義によって領導されねばならない。

またわれわれは、他の被抑圧諸階級層をプロレタリア社会主義革命の味方にひき入れていくために、全人民的政治闘争を組織し、その階級的領導を組織しなければならない。全人民的政治闘争は、プロレタリアートのみならず、他の被抑圧階級層を含むものであり、したがってそのかかげうる政治要求は、プロレタリア政治要求にくらべて不徹底であり、あいまいさのつきまとうものである。その階級的領導のためになすべきことは、全人民的政治闘争の内部においてプロレタリアートの政治要求を峻別し、そのもとに被抑圧諸階級層の政治要求を糾合していくことである。

われわれがかかげてきた五つの大衆的政治スローガンは、現在が革命的高揚期ではなくそれへの「はざかい期」であり、われわれが当面はたらきかけるべき対象が組合内の活性化したプロレタリアートであることを前提にしたうえで、政治闘争と経済闘争の結合を組織するための、全人民的政治要求・政治闘争からプロレタリアートの政治要求を峻別し全人民的政治闘争を階級的に領導していくための、当面するプロレタリア大衆政治要求の基準である。

第三に、党による独自の革命的政治闘争の組織化である。革命的政治闘争とは、被抑圧階級の段階にあるプロレタリアートの最高の政治要求＝プロ独権力の樹立と、最高の政治決起＝武装蜂起をかかげた政治闘争である。それは、現実のプロレタリア階級の圧倒的多数がこの革命の要求から遠くへだてられているこんにちから組織されつづけていかねばならず、その意味で党が独自に組織すべき政治闘争である。この事業なくして、こんにちのプロレタリア政治闘争を将来にむけて領導することはできず、先進的プロレタリアートを歴史的な革命の任務と革命の組織に結集させることはできない。同時にその形態は、全国委三〇一号路線党建設初期のごとく「全国政治闘争」という一形態に固定される必要はなく、ステハリ・宣伝戦から、独自政治集会、独自党派闘争にいたる多様な形態で組織されるべきものである。

反戦反核運動を領導せよ

このような原則的立場をふまえ、先進的プロレタリアートは、わが国政治闘争の現状を根底から変革するためにたちあがらねばならない。昨八二年五・二三東京四〇万人集会、十・二四大阪五〇万人集会と巨大な高揚を現

出した反戦反核運動はこんにちにおける全人民的政治闘争であり、その政治要求は「反戦平和」にある。それは、広範な人民の将来生活への不安と戦争の脅威への危機感に根ざすものであるがゆえに、さらに持続し、広範な人民を政治生活にひき入れていく水路となりつづけるであろう。だが、プロレタリア政治闘争の建設という見地からすれば、反戦反核運動の現状は、抜本的に変革されねばならないものである。

その第一は、プロレタリアートの政治要求・政治闘争が全人民的政治要求・政治闘争の中に解体していることにある。「反戦平和」という政治要求は、プロレタリア政治要求の萌芽を内包するものではあるが、同時に小ブルジョアジーやブルジョアジーの一部の政治要求でもある。たたかうプロレタリアートは次の点をこそ明確しなければならない。帝国主義の侵略反革命戦争は資本主義と帝国主義そのものに根ざしていること。この地上から帝国主義戦争を根絶していくことは、帝国主義を全世界的に打倒し、資本主義を廃絶していくことをとおしてのみ可能であること。そして、プロレタリア階級のみが自らの階級としての解放と結びつけてこのたたかいを領導することができる。だからこそ、「反戦平和」をかかげた全人民的政治闘争は、武装蜂起―プロ独にいたるプロレタリア政治要求のもとにたえず領導されつづけられない限り、日帝ブルジョアジーがふりまく「平和を守るためには安保・軍備増強が必要だ」などの排外主義煽動に無力であるばかりか、解体する危険すら内包するものである。

われわれは、反戦反核運動の中に、自国帝国主義の侵略反革命戦争準備との闘争を中心とする当面のプロレタリア大衆政治要求をもちこみ、プロレタリアートを全人民的政治要求をこえて武装蜂起とプロ独にむけたプロレタリア政治闘争へ全力で突出させていかねばならない。そして、これをもって反戦反核運動を階級的に領導していかねばならない。

その第二は、この階級的領導をなすべきプロレタリア階級が、組織された階級の部隊として登場できていないことである。たちあがるプロレタリアートの大半が分断された個人として、それも市民運動の一員へと解体している現状を抜本的に変革しなければならない。

その時、われわれはいかなる意味でもこんにちの階級闘争が要請するプロレタリア政治闘争の建設戦を社共にゆだねるわけにはいかない。社会党は、このかん「反戦平和」という全人民的政治要求すら事実上投げ捨てはじめ、帝国主義的社民への完成化にいたろうとしている。社会党新委員長石橋は、就任と同時に安保・自衛隊の容認を前提とする「社公連合政権合意」をふたたび推進すると宣言した。そして、中曽根の「非武装中立論」批判にあわてふためき、「すぐに安保と自衛隊をなくせとは言っていない」と弁明につとめてしまつである。社会党は、立脚基盤である総評の全民労協への合流にともない、ますます排外主義に転落し、いずれ民社・公明とかわるところのないたるであろう。

このような社会党を安保・自衛隊の容認と批判する日共もまた日帝の侵略反革命戦争準備との闘争を否定し、ただ安保は日本をアメリカに従属させ、自衛隊は日本を守るものではないという理由から、安保・自衛隊に反対しているにすぎない。そして、彼らの政治闘争は、第一にプロレタリア階級の利益に立脚するものではなく、これに優先するものとしての「国民的利益」「市民的利益」に立脚するという反プロレタリア的性格につらぬかれるものであり、第二に日帝の侵略反革命戦争にブルジョアジーと同様に、「日本民族とその国家」を防衛せんとする排外主義に満ちたものであり、第三に中間連合政府の樹立のための集票運動という性格にとどまれたものである。社共は結局ブルジョアジーと同じ土俵に立ち、ただ「日本民族とその国家」の危機救済のためのより平和的な道があると主張しているにすぎない。こうして彼らは、労働者人民のプロレタリア政治要求への突出にまっこうから敵対し、全人民的政治闘争を、ありもしない帝国主義下の平和の幻想につなぎとめ、議会主義・排外主義の沼地にひきこまんとする部分である。われわれは、今秋社共が「十・一二田中判決」を焦点にした「政治倫理問題」と総選挙準備にいっさいを流しこもうとすることを批判するとともに、社共の政治闘争の反動性・反プロレタリア性を暴露し、社共の影響からプロレタリア人民を奪い返していかねばならない。

プロレタリア政治闘争を

われわれは、この数年間の帝国主義的労戦統一との闘争のなかで生みだされてきた潜在する反社共十万プロレタリアートに立脚し、壮大なプロレタリア政治闘争の建設戦にふみだしていかねばならない。だが、この十万プロレタリアートは階級闘争の前進にとってまだ有効な組織化をなされておらず、また彼らのあいだには「社会主義」への不信や絶望が広範に存在している。

その時、総評内左派を中心とした労働者活動家の結集体として一定の積極的役割をはたしてきた労働情報と「全国労組・活動家連絡会議」は、この現状を変革するための有効な活動をつくりえていない。労働情報が数年前からかかげてきた労働者綱領については現在の局面に対して力を発揮しうる有効な論争として組織されておらず、また全国労組連の獲得に関しても実力ある労組連合を形成しえず伸び悩んでいる。労働情報内右派潮流はこのような実情をふまえて、一方では右翼日和見主義党派ブロックを固めつつ、他方で社民―民同左派の労研センター主流派に追随し、最終的には日共と協会派の共闘下でのナショナルセンター形成に無批判に合流していくことはまちがいない。そして、政治闘争面でもプロレタリア政治闘争と全人民的政治の階級的領導のための全国的共闘としての役割をはたせず、日市連など俗流市民主義運動への追随と溶解を深めている。

われわれはプロレタリア政治闘争の基礎からの創建の事業にとって、反社共十万プロレタリアートを帝国主義的労戦統一と対決する階級的労働組合運動の全国陣型に全力で組織していくことが一方の不可欠の条件だと確信する。それは労働情報内右派潮流とはまったく相反する道を通してのみ可能である。反社共十万プロレタリアートの組織化の前衛をとりきりつつ、全民労協や日共＝統一労組懇に対決しうる独自の戦略陣型を強化していかねばならない。そのためには㈠破産した総評労働運動路線ときっぱりと手を切り、その総括にもとづく新たな労働運動路線を確立していくこと㈡日共＝統一労組懇に対する右からの、反共主義の側からの批判ではなく、共産主義と階級闘争の側からの批判を確立していくこと㈢拠点となる実体ある労組の地域共闘、単組・産別の有力な拠点を握りしめることが必要である。未組織労働者の組合結成への援助・連帯戦、右翼労働貴族の手から組合執行権を奪還していく強力なたたかいが不可欠である。

われわれはこうして形成される階級的労働組合運動の全国陣型を、全人民的政治闘争の中軸に登場させ、その内部から広範なプロレタリアートをプロレタリア政治要求へと突出させる。そして反戦反核運動をプロレタリア階級とその政治要求を中軸とする闘争へと領導すべく全力をつくす。この数年間の帝国主義的労戦統一とたたかう階級的労働運動の全国陣型建設の成果を総結集し、われわれはこの事業にとりかかる決意である。

日和見主義者たちの誤り

それでは、右翼日和見主義諸党派、急進民主主義諸党派は、プロレタリア政治闘争建設の領導者たりうるのか。断じて否である。右翼日和見主義諸党派は、今春「中曽根倒閣実行委運動」を全国的に展開すると宣言し、今秋レーガン闘争をその延長上に設定せんとしている。そして活性化する種々の小ブル市民主義運動にすりより、社会党（労研センター）と結合することをもって日共と競合せんとしているのである。この具体化である六・一九東京反安保集会はまったくの「反中曽根護憲集会」となった。彼らは全人民的政治闘争に決起する労働者をプロレタリア政治闘争へと

突出させるのではなく、小ブル市民主義運動に溶解し、社会党のスローガンにすりより、社共の反プロレタリア的政治闘争へと合流をすすめている。とりわけ、ソビエト主義によるプロ独の否定、平和ゼネスト革命路線による武装蜂起の否定を立場とする四トロとの闘争が重視されねばならない。四トロは「社共は労農政府を樹立せよ」「社共との統一戦線を」と叫び、プロレタリアートを社共との和合へとひきこみ、その政治決起の一切をたかだか「社共に統一戦線を強制する」圧力にまで閉殺・歪曲せんとする。プロレタリア政治闘争の領導は、いささかも妥協することのない樹立すべき権力と革命の戦術をめぐる社共との党派闘争なしにはありえない。このような彼らが、いかに「労働者の階級的ヘゲモニーが必要だ」と叫ぼうとも、どうしてプロレタリアートの独自の階級的政治要求と政治決起を領導することができようか。

他方、中核派など急進民主主義諸党派は、今春攻防のなかでプロレタリア階級の組織化をめぐる社共・右翼日和見主義との党派闘争から自己を隔絶し、三里塚闘争局面に追いこめられていく道をたどった。この数年間このような構造は継続し、彼らは自己の立脚基盤をますます被抑圧諸階級層のごく一部にのみせばめ、階級闘争全体への対応力を喪失していかざるをえない。このような彼らもまたプロレタリア政治闘争の領導者たりえない。

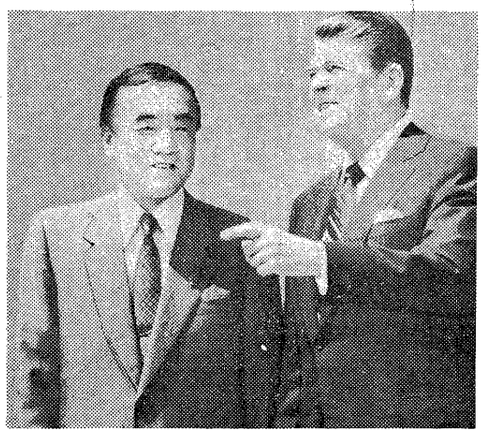
レーガン闘争に決起せよ

すべてのたたかう労働者人民諸君！われわれは、社共の排外主義的反プロレタリア的政治、右翼日和見主義の市民主義政治とたたかい、日帝の戦争とファシズム準備と対決するプロレタリア政治闘争とそのための大衆的政治統一戦線の建設にいまこそふみださねばならない。レーガン来日・訪韓阻止闘争をこの将来にむけた壮大な事業の第一歩として組織するようよびかける。そのために、レーガン来日・訪韓阻止闘争を次のようなたたかいとして組織しきらねばならない。

第一に、中南米、中東、アジアなど全世界で高揚する反帝民族解放闘争に連帯し、プロレタリア人民の内部を国際主義か排外主義か、まっぷたつにわりきるような闘争としてたたかいきることである。そして、反帝民族解放闘争の唯一の勝利の道であるプロレタリア社会主義革命との結合とそれを領導する前衛党建設への連帯、自国帝国主義＝日帝の侵略反革命戦争を内戦に転化するという日本プロレタリアートの国際主義的任務のもとに先進的プロレタリア人民の広範な結集をかちとらねばならない。

第二に、反戦平和という今日の全人民的政治要求のもとに圧倒的な組合大衆を決起させ、その広範な土台のうえに先進的部分をプロレタリア政治要求へとひきあげていくという一個二重のたたかいとして組織することである。

かつて総評の政治闘争は、その時々の全人民的政治要求のもとに組合を動員し、一定の戦闘性を発揮した。それはまちがいではなかったし、必要であった。彼らの誤りは、全人民的政治要求（闘争）に決起せんとする部分に敵対し、組合権力をもって弾圧したこと、そして社共がこの総評政治と結びつき、議会内における政権交代へと収れんさせたことにあった。六〇年代末に至るブントの政治闘争は、この総評の政治闘争の高揚を所与の条件としてその限界と不徹底ではあってもたたかわんとしたものであった。


レーガン来日は中曽根の戦争準備を加速する

八〇年代、戦争とファシズム準備の吹き荒れる今日、帝国主義的労戦統一への総評の合流は、全人民的政治要求へと組合を大量に動員した総評政治闘争そのものを急速に解体させてきた。そして次の階級的大流動期に至る過渡期という条件に規定され、帝国主義的労戦統一派の直接的支配下にない組合の大衆であったとしても、ただちにプロレタリア政治要求のもとに結集させうる状況にはない。党と労政の意識的努力によって、全人民的政治要求のもとに、組合と組合大衆の大規模な組織化がなされねばならない理由がここに存在するのである。

それがかつての社共・総評の政治闘争と断固として峻別される点は、全人民的政治闘争の中に閉殺するのではなく、プロレタリア政治要求と政治闘争に全力で大衆を解き放とうとすることである。そして組合をしてプロレタリア政治闘争への先進的部分の突出を支持し、それへの弾圧と断固としてたたかわしめることである。だからこそ、われわれは当面するプロレタリア大衆政治要求をもちこみ、武装蜂起とプロ独をかかげたプロレタリア政治闘争への最初の大規模の行軍をつくり出さねばならない。先進的プロレタリアートは、㈠帝国主義の侵略反革命戦争との闘争㈡反帝民族解放闘争、民族解放－社会主義勢力との連帯㈢日帝の侵略反革命戦争とファシズム準備との闘争㈣労働運動の産業報国会化との闘争㈤社共＝中間連合政府派との闘争をかかげ、この任務の前衛にたちきっていかねばならない。そして、このプロレタリア政治要求のもとに大衆を前進させ、全人民的政治闘争の階級的領導のために、プロレタリア大衆政治的統一戦線の建設に実践的に着手していくことである。

第三に、新たに結成された労政をきたえあげ、新たな先進的プロレタリア人民の結集をかちとることである。労政は、今日における護民官的前衛・政治的前衛の任務を担いながら、自己と先進的労働者人民を武装蜂起とプロ独へ結集させつづけていく中央集権非合法党と結合した武装せる革命の伝導路組織である。われわれはレーガン闘争のただ中で労政をして全人民的政治闘争組織化の先頭に立ち、それにとどまらずプロレタリア政治要求への先進的部分の組織化を担う政治的前衛として断固として建設する。そして武装蜂起とプロ独の樹立に至るプロレタリア政治闘争建設の輝やかしい不屈の領導部隊として、わが国階級闘争の最前線への登場をかちとらねばならない。

今秋期、次の具体的闘争への結集をよびかける。

第一に、十一月レーガン来日・訪韓阻止闘争を京都・首都をつらぬいてたたかうことである。京都では、階級的労働運動の陣型をつくるべくたたかってきた戦闘的労組とその地域共闘、そして労政が中心となり「レーガン来日・訪韓阻止京都労働者実行委」の結成が準備されている。そして労働者階級を中軸とし学生団体・市民運動団体をも参加する大衆的統一行動として十一月闘争をたたかいぬこうとしている。十一月六日労働情報系中央集会、十一月九日（予定）京都集会を、プロレタリア政治闘争の基礎からの再建にむけてたたかいきらなければならない。

第二に、レーガン来日・訪韓阻止闘争のプロレタリア的領導部分の独自的結集と前段政治決起集会をたたかいとっていくことである。関西では、全国労政が先頭となり「一〇・二〇レーガン来日阻止・帝国主義的労戦統一反対全関西集会」（主催一〇・二〇実行委）が準備されている。レーガン来日・訪韓阻止にたちあがる広範な労働者人民のなかから、先進的部分の結集をかちとり、プロレタリア政治闘争建設の前衛的領導部隊の登場を断固としてかちとらねばならない。

十一月に来日するレーガンの両手は、まさに中南米人民、中東人民、アジア人民の血にまみれている。そうだからこそ、必ずやレーガン訪韓・訪アはすさまじいばかりの反米（帝）闘争の嵐に迎えうたれるであろう。そしてその闘争の刃は、日帝をも貫ぬくものである。わが日本プロレタリアートは、いまこそこの国際的激動のなかに、真紅の国際主義の旗をうちふり登場しなければならない。ともにたたかわん。

9・15 三里塚現地に三五〇〇

成田用水路着工阻止を宣言

九・一五三里塚現地総決起集会は、三五〇〇名の労農学の結集でたたかいぬかれた。

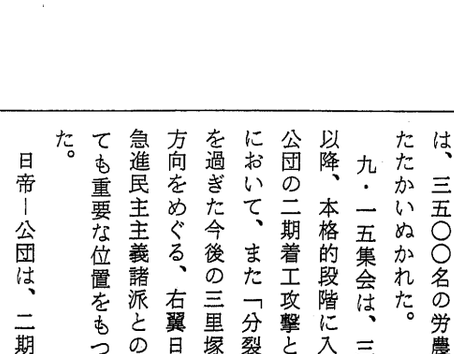
九・一五集会は、三・八「分裂」以降、本格的段階に入った日帝―公団の二期着工攻撃とのたたかいにおいて、また「分裂」以降半年を過ぎた今後の三里塚闘争の発展方向をめぐる、右翼日和見主義、急進民主主義諸派との闘争においても重要な位置をもつものであった。

日帝―公団は、二期着工を日程にのぼらせ、下からの二期着工推進運動の組織化を背景に新たな「対話」攻撃と成田用水着工をもって反対同盟破壊―条件派育成攻撃に全力をあげてきた。このなかで九・一五集会は、この攻撃と断固としてたたかい、成田用水着工阻止を反対同盟が正面からうちだすものとしてたたかいぬかれた。これは今後の三里塚闘争の発展の前提を形成するものとして、しっかり確認されねばならない。

だが一方で三里塚闘争の清算、解体、変質の策謀を強める右翼日和見主義との強力な党派闘争の組織化が、ますます要求されていることを九・一五集会が示したことも事実である。

反対同盟と、発言にたった多くの先進的農民は、「軍事空港粉砕」「三里塚を反戦・反核の砦に」「国際連帯」という三里塚闘争の先端地平をかかげた。同時にまた「たたかう人民の村建設」「みどりの大地のために」という方向をも並列させたものとなった。これは、反対同盟と先進的農民が、「農地死守」の戦闘的ではあっても孤立した農民運動からの脱脚の模索のなかにあること、すなわち戦闘的農民運動としての三里塚闘争の逢着に直面していることの反映である。だが、これに対し右翼日和見主義諸党派は、三里塚闘争の先端地平としての「反戦・反核の砦」という全人民的政治要求との結合の発展方向を、社共の小ブル平和主義や、小ブル市民主義のなかに解体させるとともに、反自民をゆいいつの基準とした新たな議会主義のもとに三里塚闘争そのものを変質させんと策謀しつづけている。

そして彼らは、反対同盟が「人民の村建設」をかかげようと何であろうと無批判に結びつき、もちあげつつ自らの右翼日和見主義政治へのひきこみを画策している。



われわれは、かかる右翼日和見主義とのたたかいを三里塚闘争と反対同盟が直面している戦闘的農民運動からの脱脚、プロレタリア階級闘争への飛躍、階級的労働運動との結合のために、階級的労働運動建設を中心とする全階級戦線においておし進めねばならない。

一方、三里塚闘争とその団結を古い戦闘的農民運動の地平に閉殺する急進民主主義＝中核派は、九・一五集会への敵対を組織し、三里塚闘争を狭い戦術的分岐をめぐる対立へとかりたてることによって、ますます三里塚闘争の前進にとっての阻害物へと純化してきている。

「階級的労働運動と三里塚闘争の結合」をかかげて先進的農民とともにかちとった八・二〇集会の成果の上に、さらに強力に攻勢的にたたかいをおしすすめていかねばならない。全国から新たなたたかいを！

8・20 階級的労働運動と三里塚闘争の結合をかかげ 労農学政治討論集会 開かる

八月二〇日関西において「階級的労働運動と三里塚闘争の結合をめざす労農学政治討論集会」が三里塚反対同盟代表補佐である笹川英祐氏、副行動隊長である小川清之氏を招いて開催された。

本集会は、次の目的のもとにおこなわれた。日帝＝空港公団のすさまじいばかりの二期着工攻撃のなかで、三里塚闘争は、闘争史上最大の困難に直面しているといっても過言ではない。いまこそ、三里塚闘争を敵＝国家権力の破壊攻撃と右翼日和見主義による清算、解体、変質の策動から防衛し、三里塚闘争を社会主義革命をめざすプロレタリア階級闘争の強力な一翼へと発展させるために全力をつくすべき時である。われわれは、そのための実践的なかなめである階級的労働運動と三里塚闘争の結合をつくりだし、それを可能とする三里塚闘争の新たな前進を先進的農民とともにきりひらくべく本集会を開催したのである。

司会あいさつ、基調提起のあとあいさつに立った笹川英祐氏は、「軍事空港をつくらせない、戦争をさせないというのは、十八年間にわたる三里塚闘争開始以来の姿である。反戦反核反安保の砦ということを重視したなかで、自分のたたかう道をみつけていきたい。そして、成田用水反対、自主耕作推進、一坪共有化、事業認定取り消し訴訟の四本立てでたたかう」と力強く発言された。また、小川清之氏も、反対同盟の闘争方針を紹介したうえで「われわれ反対同盟は成田用水に絶対反対である」と宣言された。

両氏の発言をうけて、自立労組連タカラブネ労組、同永幸労組、洛南合同労組堂坂支部など階級的労働運動建設の先頭に立ってきた戦闘的労組、そしてプロレタリア政治闘争建設を領導せんとしてきた各労研、戦争問題を考える会などの代表発言をうけ、自由討論をおこなった。

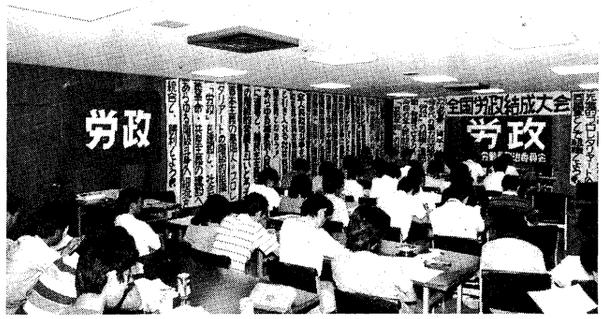
各団体の意見がもっとも集中したものは、このかん反対同盟がかかげてきた「空港よりも緑の大地を」というスローガンについてであった。

自立労組連中執やタカラブネ労研の代表は、「反対同盟が『緑の大地を』と主張した根拠、すなわち二期用地内部落や農地の荒廃の解決、そして孤立した農民運動からの脱脚の狙いは理解する。しかし、三里塚闘争の全人民的発展を支えるものはゆいいつ反戦反核という全人民的な政治闘争と結合す

全国労政結成さる

9・18

資本主義の墓堀人＝プロレタリアートの階級的組織＝労政を建設し、社会主義革命・共産主義の建設へあらゆる階級闘争の細流を統合し、勝利しよう！



九月一八日、わが全国労働者政治委員会は、歩みをともにせんとする先進的労働者、学生とともに一堂に会し、結成大会をたたかいとった。タカラブネ労研、電通労政、高槻労研を核とし、東京をはじめとした各地区からの新たな労政員の結集をえて全国労政はその最初のたたかいにふみだしたことを全国の同志友人諸君に報告する。

われわれは本大会において、戦争とファシズム準備の嵐の時代に長期にわたるプロレタリア階級の組織化のために献身すべく団結した。

大会冒頭、結成宣言がよみあげられ第一号議案労政行動綱領の採択に入る。行動綱領は、われわれの生きかつたたかうこの時代と労働者階級の歴史的任務を簡潔に整理するとともに、ここ数年間の先進的プロレタリアートの全体任務を提起した労政のたたかいの指標である。第二号議案労政組織原則につづき、第三号議案労政活動基調が提起される。ここでは労政の任務基調を①階級的労働運動の陣型構築戦と階級形成戦②大衆的政治統一戦線の構築戦③社会主義革命をかかげた革命的政治闘争と共闘の建設戦④組織と団結の建設戦としてうち出し、これを今秋季レーガン闘争を主軸として総力でたたかいぬくことを確認した。

つづいて戦争問題を考える会、労働者活動者会議からの連帯アピールがおこなわれる。労活の同志は「党建設と結合した労政の結成を断固支持する。大衆的たたかいを党建設へと結合し、プロレタリアートの最終的勝利の大道へ！」と訴え、今後の長期的共闘をしっかりとうち固めた。

各労政の単一労政建設に向けた決意表明をうけ、最後に議長あいさつでしめくくった。労政は、今日のわれわれの直面する階級闘争の要請にこたえるために結成された。労政はプロレタリアートの大群を、武装蜂起とプロレタリア独裁の歴史的主体として獲得していく任を負った単一の武装せる革命の伝導路組織である。われわれはこの任務を双肩にひきうけ、労組のなかへ、地域のなかへ、全人民的政治闘争のなかへ突撃する。

全国のたたかう労働者・学生は全国労働者政治委員会に結集せよ。

団結して日本帝国主義を粉砕しよう」という団結ガンバローは、全集会参加者の心をひとつにした明日からのたたかいへの戦闘宣言であった。右翼日和見主義、急進民主主義とたたかい、八・二〇集会の成果を三里塚闘争の階級的前進へと転化すべく、われわれは全力でたたかいぬく決意である。

集会は、先進的農民との率直な討議のなかから、三里塚闘争の新しい前進をともにつくりだしていく第一歩ともいうべき成果をかちとった。集会をしめくくった小川清之氏の音頭による「労農連帯！

なぁという気分もあるんですよ。皆さんの意見を参考にしてがんばります」と発言された。

清之は、「きっとそうでしょうね。三里塚だから『緑の大地を』ではカッコつかなかったかもしんねぇね。こっちの方から見れば、百姓は緑の大地が欲しいんだ、というだけのことしか感じとれなかったということは残念だと俺は思っている。……正直言うとねぇ、今日の集会でねぇ、痛いとこつかれたることにある。三里塚闘争はそれにとどまらず、反帝国主義の旗をさらに高くかかげ、反戦反核運動を日帝の戦争とファシズム準備と対決するものへと領導していくべきである。そうすることだけが、階級的労働運動との固い結合をつくりだせる道である」と訴えた。

討論の最後に発言に立った小川

投稿

地域共闘の力で相次ぐ労組結成

京　都

洛南合同労組　一組合員

七月、九月と京都において二つの新しい組合が結成された。その一つは洛南合同労組木下支部と、二つめは洛南労組連丸石沼田労組である。

丸石沼田労組はかまぼこ、ちくわなどを製造する会社につくられた組合である。九月六日早朝より門前において組合オルグが開始され、昼休みの段階で従業員の三分の二が組合に加入した。現在では組合員は一五〇名にたっし、全従業員の九〇％をこえている。

九月六日夕方からの決起集会には、組合員一〇〇、洛南労組連の支援一五〇名が結集し、引きつづく第一回目の団体交渉になだれこんだ。会社側は「組合は認めない」と一言いったまま組合の要求に何も応じようとしない。このことに対して沼田労組、支援の組合員からいっせいに批判の声があげられ、交渉は深夜一時にまでおよんだが決裂した。

会社側は沼田労組の団結の固さと洛南労組連の支援に恐怖し、ガードマンの導入、労務屋三名の導入を行なった。しかしたたかう労働者は敗けない。沼田労組青年部の結成、連日昼休み時間をつかった隣の自立労連永幸食品労組からの全力動員した交流集会、また連日の早朝ビラなどたたかいは一歩もひいていない。会社側は永幸労組の支援を分断しようと廊下にロッカーなどをひっぱり出しバリケードを作ったが組合員と支援の力のまえに粉砕された。労務屋追放のたたかいは連日たたかわれ、沼田労組、洛南労組連の団結はいっそうたくましくなっている。

丸石沼田労組の対資本抗議闘争